

「正義の味方」を望んだ悪

月海豚

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

！注意！ この小説は「ひねくれ少年とリリカルマジカルな世界」のタイトルを変更したものです。

少年は「正義の味方」に憧れていた。

少年は救いを求めていた。

だが現実是非情だった。

時は経ち、少年は魔法少女リリカルなのはの世界に転生する。それを機に、少年は動き始める。

「正義の味方」を生み出すために。

- ・ 作者はf a t eシリーズをアニメで見たことしかありません
  - ・ 作中に登場するオリキャラには、死亡するキャラもいます
- 以下のが嫌いな方は読まないことをおすすめします。
- 別に大丈夫、という方は楽しんで読んでもらえると幸いです。

## 目次

くジコシヨウカイく	この世界の神様は太っているらしい	1
くテンセイく	神様はブラック企業に勤めているらしい	4
くチコクく	朝から走るって意外と気持ちいいよね	7
くフミダイく	あだ名は「コンちゃん」にしてみた。可愛いだろ？	10
くカリウドく	高校生とリアル鬼ごっこしてみた	13
くコウハイく	未成年の飲酒はダメ、絶対	17
第一章 無印編		
くヒルヤスミく	屋上が解放されている学校は案外少ない	21

くジコシヨウカイく この世界の神様は太っているらしい

突然だが君に一つ質問してみたいと思う。

君は輪廻転生というものを知っているだろうか？

死んであの世に還った魂が、再び生まれ変わるという現象のことを一般的に輪廻転生と呼んでおり、様々な宗教でその考えは信じられている。また、同じ輪廻転生でも輪廻と転生という二つの現象があり、イヌやネコなど、人間以外にも生まれ変わることが輪廻と呼び、人間のみに生まれ変わることが転生と呼ぶ。

さて、いままで散々偉そうに話してきたわけだが、実のところ俺もつい数十分前までは輪廻転生の意味なんて全く知らなかった。この知識もあの通りすぎりのハゲに教わったものだ。

「誰が通りすぎりのハゲじゃ小僧、言葉に気を付けろ」

・・・いい加減他人の心読むのやめてもらえないか？プライバシーの侵害で訴えるぞクソ野郎・・・

俺がそう小さくつぶやくと、そいつは呆れたように小さくため息をついた。まあ、気持ちは分からなくもない。出会ってから数十分しか経っていない人間にここまで暴言を吐かれているのだ。俺ならそんなやつとは会話なんてしたくないし、するつもりもない。そんな生意気な野郎はこの世からいなくなるべきだ。

・・・いや、それだと俺は死なないといけなくなるな・・・今の発言はなかったことにするか・・・

「バツチリ聞こえておるわ馬鹿者。それに小僧、お前はそんな心配をしなくてもよかったはずだが？下らんことを言っていないで、さっさと本題に戻るぞ」

チツ、せつかちだな神様って奴は。・・・でもそうだな、いつまでもこんなところにいるわけにもいかない。そろそろ真面目に話を聞くでしょう。

少年は静かに、ゆっくりと立ち上がる。そして、後ろに振り返り、心

底つまらなそうにこう言った。

「言い忘れていたが俺の名前は神田新。どこの世界にもいる、ただの男子高校生だ」

新side

目を覚ましたら、目の前に真っ白な世界が広がっていた。

・・・これは、あれだな、夢だな・・・、もしくはまたアイツに変な薬でも盛られたか・・・。

前者ならまだマシだが、後者だとしたら最悪だ。俺は永遠の眠りに付いてしまったのかもしれない。ということは、ここは死後の世界か。クソツ、こんなことになるんだつたら二、三回殴るべきだったなア、アイツの顔面・・・。

「正解じゃ小僧、よく分かったな」

俺が自分の過ちに後悔していると、頭上から男の声がした。頭を上げると全長数十メートルの上半身裸の男が俺を見下ろしていた。

ちなみに、かなりのデブだった。

・・・

「・・・うん？どうしたおぬし、そんな死んだ魚のような眼で黙りこくつて。まさか小僧、わしのこの神々しい姿に感動して「ふっぎけんなあああ!!」

「誰がお前みたいなじじいに感動するかッ!?大体、人様に見せていいほどの体じゃねーだろ、無駄な脂肪を見せつけてるんじゃねーぞこの野郎ツツ!!!」

ふう・・・、らしくもなく取り乱しちまったぜ、まあ言いたいことは言えたので、スッキリはした。うん、自分に正直なことはいいことだ。

さて、では目の前の問題をどうにかするとしよう。

神田新、17歳。

どうやら俺は神様を怒らせたようだ。

くテンセイく 神様はブラック企業に勤めているらしい

新side

どうも、ついさつき神様に暴言吐いて怒らせた神田新です。反省はしているが後悔はしていない。

・・・うん、ものすげえ怒ってるなアイツ。なんか周りから怒りのオーラっぽい物が漂ってるし。空気もビリビリ振動してるし。なんかアイツの周りだけ亀裂が走ってるし・・・。今にも未知の神様POWERで粉々にされそうだな。さて、どうやってこの危機を乗り切るか・・・。

・・・何も言わなかったことにするか。

「そんな都合よくいくわけないじゃろうツ!!? いったい何様じゃ小僧、出会い頭に神であるわしをばかにs「神田新様だが?」って、喧しいわツツ!!」

「まあまあ、何があつたかは知らねえがいったん落ち着けよ。血圧上がるぞ。」

「マジでさつき<sup>天</sup>の発言をなかったことにする気か小僧!? その手には乗らんぞ!!」

チツ、うまくいくと思つたのに・・・。

神様side

全くこの小僧には困つたもんじゃ。話が全く進まん。おまけにわしのことをデブだとぬかしおつて! 仕方ないじゃろう!? 最近やたらと人間がこちら<sup>界</sup>側のミスで死ぬものだから、この150年間休みらしい休みを取れていないんじゃないぞ! 一昨日だつて、わざわざ地獄まで行って、閻魔大王に謝罪をしに行つたんじゃないぞ! 食生活が疎かになつても仕方なからう!

・・・にしてもこの小僧は相当な変わり者じゃな。わしも長年この

仕事について居るがこんな人間は初めてじゃ。大抵の人間はわしの姿を見た瞬間に失神するか、腰を抜かすんじゃないが・・・、なぜこいつは平静を保っていられる？

「そんなに難しい事じゃねえよ、非現実的な事に慣れてるだけだ」

「・・・わしはまだ何も言っていないが？」

「バレバレなんだよアホ。顔に出しすぎだ」

・・・この小僧には少し礼儀とやらを教えてやらなければならないのう・・・。それにしても、恐ろしい物じゃな。慣れというものは。

## 新side

さて、再び俺sideだ。ん？何を言っているのか分からない？安心しろ、ただの独り言だ。

「何を一人でブツブツ言っておる。早く本題に入るぞ」

神様が俺を急かしてきた。聞いたところによると、この仕事の後も248件の仕事が溜まっているそうだ。

・・・相当ブラックな企業に勤めてんだな、アイツ・・・。

「さて、神田新。これからお前にはとある世界に転生をしよう」

「やっぱりか・・・、そんなことだろうと思ってたよ」

「ほう、ならば話は早い。お前には欲しい特典を決めてもらう」

特典か・・・。

どんな世界に行くかで、何を選ぶかだいぶ変わってくるよな・・・。

・・・よし、どうせ選ぶなら物凄いチートな特典にしよう。

「俺が望むのはfateシリーズの力だ」

「ふむ、それは全ての宝具を使えるようにする、ということか？」

「いや、そうじゃない」

「？」

「俺が望むのは宝具だけではなく、サーヴァントが持つ全てのスキル、そして魔術師としての才能だ」

俺がそう言い放つと、奴は目を大きく見開いた。まるで、人間ではない別の何か怪物を見ているかのように。そんな奴の表情を見て、俺は小



さく笑う。

「小僧・・・、正気か・・・？」

「もちろん正気だとも。狂っているのはアイツだけで十分だ」

「・・・小僧、お前はその強大な力を持って次の世界に何を望む？」

「まだ決めてねえよ、そんな事。備えあれば憂いなしっていうことわざがあるだろ？大体どんな世界に行くことになるか、まだ分からねえし。それに・・・」

ソツチノホウガ、オモシロソウダロ？

くちコクく　朝から走るって意外と気持ちいいよね

なのはside

「にやあああああああつ!?も、もうこんな時間!?遅刻するのー!!」

私はうるさくなり続けていた目覚まし時計をのぞき込んで悲鳴を上げた。現在の時刻、七時三十分。学校に向かうバスの発車時刻、七時四十五分。すぐに準備しないと絶対乗り遅れるの……。

「なのはー?、隼人君が迎えに来てるわよー?」

「隼人君が!?わ、分かったの、すぐ行くのー!」

私が慌てて準備をして玄関に向かうと私の幼馴染、天宮隼人君は足踏みをしながら私のことを待っていてくれた。

「やばいぞなのは!急がないとバスが出ちまう!」

「分かってるの!いつてきまーす!!」

私、高町なのはは今日も幼馴染と、通学路を全力疾走中です。

隼人side

「なのは、がんばれ!あともう少しだぞ!」

「あ、足がもう限界なのー……」

俺の名前は天宮隼人(あまみやはやと)、私立聖祥大学付属小学校に通う小学三年生だ。俺には誰にも言えない秘密がある。それは俺が「転生者」だという事。あの日、俺はトラックにはねられそうになっていた女の子を庇って死んでしまった。その時にこの世界の神様が、俺にこの世界に転生する権利を与えてくれたんだ。アニメはあまり見ていなかったからどんな世界か全くわからなかったの、特典には「その世界で必ず必要となる物」を願った。神様は俺の要求を快く受け入れてくれて、困ったときはいつでも連絡をしないと声をかけてくれた。こうして俺はごく平凡な家庭に転生したわけだ。

……それにしても、毎回思うんだがあいつはもつと早く起きれないのか?この一週間ずつとこんな感じなんだが……。

「なのはー！隼人ー！早くー！」

「バス出発しちゃうよー！」

ふと顔を上げると、幼馴染のアリサとすずかがこっちに向かって手を振っていた。バスは今にも発車しそうだ。

「うおおおおおおおおおおおおおおつ!!!」

ズザザアアアツ!!

俺は間一髪で車内に滑り込む。なのはもほぼ同時に滑り込んでいた。俺たちは二人揃って安堵の息を吐いた。今日もギリギリセーフだ。

「それでは出発しまーす」

運転手さんが俺たちに呼びかけ、バスはゆっくりと動き出す。もう遅刻の心配をしなくてもいいだろう。

「今日もギリギリだったわね、アンタたち。もっと早く出れないの?」  
「またなのはが寝坊してな・・・、いやーそれにしても今回は本当に危なかった・・・」

「歩いて学校に行かなくちゃいけないって思ったの・・・」

「なのはちゃん、大丈夫?」

「なのはは運動不足だからなー。むしろ毎日このくらい走ったほうがいいんじゃないか?」

そんな・・・、となのはがつぶやく。まあそれも当然だろう。誰だってこんな時間から全力疾走なんてしたくないはずだ。俺だって嫌だし。そんな事を考えていると周りの生徒が窓を見てざわついてる事に気付く。どうやら窓の外に何かいるようだ。

「何かいるのかしら? ねえ隼人ちよつと見に行ってきたよ」

「おう、分かった」

実は俺も気になっていたのですぐに引き受ける。周りの生徒をかき分け、窓際まで進む。

「さてさて、何がいるのか、・・・な・・・」

さてここで読者に質問です。

窓の外でキラキラ光る眩しい笑顔で全力疾走している友人がいま  
した。あなたならどうする？

新side

ヒヤッハーーーーー！！！！

おっす、オラ神田新！いつちよ全力疾走してみつか!!

いやー、こんなに気持ちのいい朝には走って学校に行くに限るぜ！  
バスなんてのろいんだよおおおおおっ!!おらおら、邪魔だ邪魔だ邪  
魔だ邪魔だあっ!!!

「何をやってるんだお前はあああああ!!?」

すぐ横から怒鳴り声が聞こえてきた。どうやら俺の学校のバスの  
ようだ。

「こ、この声はッ！私立聖祥大学付属小学校きつてのツツコミ役、天宮  
隼人ッ！貴様、生きていたのか!?!」

「勝手に殺すな!?!というかなんでお前そんな笑顔なの!?!っーか速ッ！  
メツチャ速ッ!!なんでバスに追いつけてんのお前!?!」

「H A H A H A、見たかこれが俺の真の力だッ!!」

「喧しい!!!」

・・・神様、今日も海鳴市は平和です。

くフミダイく あだ名は「コンちゃん」にしてみた。  
可愛いだろ？

隼人 s i d e

疲れた……。まだ授業が始まってもいないのにすごい疲れ  
た……………。

——あれから新は俺たちが乗ったバスを軽々と追い越してい  
た。いったいあの体のどこにあんなパワーがあるんだよ……。とい  
うか新の奴、今日はいつも以上にハイテンションじゃなかったか？

「全く、あいつは副委員長としての自覚があるのかしら？」

「にやははは……………」

アリサが呆れたようにつぶやくと、俺たちは苦笑いを浮かべる。そ  
う、あいつはあれでも俺たちのクラスの副委員長なのだ。あんな性格  
なので勘違いされがちだが、新の成績は常に学年トップクラス。クラ  
スのムードメーカー的存在でもあるため、クラスメートからの信頼も  
厚い。

「まあまあアリサちゃん、落ち着いて？新君がいたおかげで助かった  
ことだっていっぱいあるでしょ？」

「確かにそうだけどねえ……………」

「へえー、あいつさぼったりしてないんだ？」

「少し見直したの……………」

そうやって何気ない会話をしているうちに、教室が見えてきた。

「さて、今日も一日がんばるか！」

「「「おお————ツ!!」」」

新 s i d e

よう、朝からバカみてえに走りまくった神田新だ。

……………うん？さつきまでのテンションはどうしたのかって？アホか。

あんなの全部演技に決まってるんだろ。俺はたいていの奴にはあの

キャラで接してるんだよ。・・・意外と疲れるんだぜ？毎日毎日演技し続けるの・・・。それなら止めたらいい、と言う奴もいるだろうがそれは無理だ。このクラスには俺と同じ転生者が二人いる。二人に俺の正体がばれることは今は余り好ましくない。一人目はさつき俺に向かつて怒鳴ってきた天宮隼人。そしてもう一人が――

「おはよう！俺の嫁たちよ!!」

・・・あれがもう一人の転生者の金剛亮（こんごうりょう）。お察しの通り、踏み台転生者だ。能力は忘れた。念のためにもう一度確認してみるか。

（・・・『真名看破』、発動）

ズオオオオオオツツ・・・

俺がそのスキルを使った瞬間、奴の名前や魔導師ランク、所有しているデバイスの情報が俺の頭に流れ込んできた。

スキル『真名看破』。本来は自分が直接遭遇したサーヴァントの真名・スキル・宝具などの情報を即座に把握するスキルだ。この世界では遭遇した人間の名前、魔導師ランク、所有しているデバイスの情報などを把握することができるとは思えない。どちらにしろ、便利なスキルであるという事には変わらない。

（魔導師ランクはAAA+, 所有デバイスは鎌型のストレージデバイスか・・・、弱いな・・・）

俺がそう結論づけると金剛が俺に近づいてきた。・・・非常に面倒だが、コミュニケーションを取ることは大事な事だ。仕方ない・・・。

「おい貴様」

「ヤッホー、コンちゃん！気持ちのいい朝だな！」

「・・・一応聞くがそれは俺のあだ名のつもりか？」

「モチのロンだぜ☆」

「・・・まあいい。それより貴様、なのはたちはどうした？いつも一緒にいるだろう？」

「いやー、別に四六時中一緒にいるつもりはないんだけどねえ・・・。なのはちゃんたちならもうすぐ来るんじゃない？隼人と一緒にバスに乗ってたし」

「何ッ!?あのモブはまだなのはたちに付きまどっていたというのか!  
クソッ、一度痛い目に合わせないと分からないらしいな!」

俺がそういった瞬間、奴は声を荒げ教室を飛び出していった。直  
後、誰かが言い争う声が廊下から聞こえてくる。おそらく天宮たちと  
金剛だろう。俺には全く関係ないので机に突っ伏し、惰眠を取ること  
にする。体力は温存させておくに限るしな。

・・・それに、放課後には楽しい「予定」狩りの時間が待ってるんだから。

くカリウドく 高校生とリアル鬼ごっこしてみた

???  
side

僕は転生者だ。

・・・一応言っておくけど、中二病とかじゃないよ。信じてもらえないかもしれないけど・・・。

あの日、僕は真っ白な世界で神様と出会い、この世界に転生させてもらうことになった。どうやら生前の僕の境遇を気の毒に思っていたようで、転生の手続きの最中にも何度か涙ぐんでいた。

自分が病弱な体質だということは理解していたし、なるべく無理をしないように気を付けているつもりだった。だから自分が死んだというのを神様に伝えられた時は、頭の中が真っ白になった。何の前触れもなく急に脳の血管が切れて、両親に何も伝えることができないまま死ぬなんて余りにも理不尽すぎる。いやー、どんなにつらい治療にも涙を見せずにがんばってきた僕だったけど、あの時ばかりは流石に号泣したね。ちなみに神様も横で泣いていた。

だけど、いつまでも泣いているわけにはいかない。僕はこれからの世界を前の世界より幸せに生きていく事を神様に誓った。そして神様に特典として「人間離れした回復力」と「未来予知」の能力を貰った。「未来予知」は神様がサービスとして受け取ってほしい、と言ってきたのでありがたく受け取った。その後、僕は神様に改めてお礼を言い、この世界に転生したわけだ。あれからすでに17年の月日が経過している。

「さーて、今日はもう帰ろっかな」

三十分ほどゲーセンで時間をつぶしていた僕はそうつぶやき、様々なBGMが鳴り響くゲーセンを後にした。こんな何気ない日常も、入院ばかりしていた前の僕には手に入れることのできなかつたことだ。今は自分を転生させてくれたことにとても感謝している。

「あれ・・・?」

しばらく歩いていると、周りの異変に気付いた。周囲に人が全くいないんだ。朝早くとか夜遅くの時間帯ならまだ理解できる。だけど



今は午後の4時半だ。いくら何でも町の人が誰もいなくなるとは考えにくい。

「いったい何が……？まるで周りの人が一人残らずいなくなっ  
てしまったみたいだ……」

少し考えてみたが、僕はすぐに考えることを放棄した。こういう訳の分からないことはこれらの学者さんたちが頭を悩ませるべき代物だ。僕には関係ない。……はあつ、何が起きているのか知らないけど、僕みたいな一般人を巻き込まないでほしいね。

「いやいやー、お兄さんみたいな転生者がただの一般人な訳ないでしよー(笑)」

「ッ!？」

誰もいなかったはずの町に知らない人の声が響く。僕が驚いて振り向くと、一本の街灯の上に小学生ぐらいの男の子が立っていた。……それよりこの子、僕の事を転生者だと知っている……!?

「き、君は一体……?」

「おおっ!そういうえば自己紹介がまだだったね!」

ぴょんつと男の子は街灯から飛び降りると満面の笑みでこう言った。

「これからお兄さんをブッコロス神田新です、どうぞよろしく!!」

新side

「こ、殺す……?何を言って……?」

うわー、見るからに動揺してやがるな。まあそれもそうか。いつまでも続くと信じていた平和な日常が一瞬で崩れ去ったんだから。崩したの俺だけど……。まずは俺が本気だつてことをアピールするか……。

「――トレース、オン  
投影、開始」

俺がそうつぶやいた瞬間、両手に二振りの短剣が握られる。

干将、そして莫耶。ランクCの夫婦剣だ。

「なっ・・・!?!」

ようやく事態の深刻さに気付いたか。だがもう遅い。

俺はすでに双剣を相手に向かって振りかぶっていた。あいつはなすすべもなく、真っ赤に染まった自分の内臓を地面にぶちまけるだろう。

(せっかく楽しみにしていたのに、これでは瞬殺してしまうな・・・)

俺はそんな事を考えていたが、

ガギンツツ!!!

不意にその思考が停止した。

明らかに人体を切断した音ではない。俺が辺りを見渡すと、さっきの少年が近くの路地裏に逃げ込むのが見えた。どうやら「未来予知」を使ってかわしたようだ。

「なーるほど。あれが未来予知かー、厄介だなー」

俺はそう結論付け呟き、路地裏へと足を進める。まるで獲物を徐々に追い詰めていく、狼のように。

狭い路地裏に、少年の声が響く。

「な、何なんだよ君は！なんでいきなり斬りかかってくるんだ!?!」

「うるさいなー、理由なんてこの際どうだっていいでしょ？お兄さんにできる事は逃げることだけなんだからー」

あれから数分が経過した。少年がまたくだらない事を聞いてきたので、さっきと同じセリフを言い放つ。・・・そんなことよりもすぐ境界を抜けちまうな・・・。楽しい鬼ごっこだったが、それもそろそろ終わらせないとな。

「Time 時 alter 制、second 二 accel 速...!」

俺がそう呟いた瞬間、

二振りの剣は今度こそ少年の体を貫いた

「ご、ぼつつつ?!」

少年が血の塊を吐き出し、そのまま地面に倒れる。どくどくと、彼の体から血液が流れだしていくのが分かる。最後の力を振り絞ったのか、彼はうつぶせの態勢のまま俺を見上げてきた。

その目が困惑の色を映している。なぜあれだけあつた距離を一瞬で縮めることができたのか、心底疑問のようだ。だがしかし、その疑問が解決される日は来ないだろう。まさか時間を加速させて、間合いをゼロ距離まで縮めたなんて思わないだろうしな。

「おにーさーん？死にそうな顔してるけど、その程度じゃ死なないでしょ？なんせお兄さんの回復力は化け物レベルなんだからー」

「な、んでそんな事……」

その問いには答えずに、俺はゆっくりと拳を構える。そしてこう言った。

「さあ、仕上げの時間だよ♪」

ドガバキグシヤメキベゴバキゴスグシヤドガバギメギョボカバ  
ギャ!!

肉をすり潰す音と骨の破壊音が、しばらくの間路地裏に響き渡った。

くコウハイく 未成年の飲酒はダメ、絶対

new side

転生者の「処理」を終えた俺は、月に照らされながら家に向かっていった。夜が生み出す闇のせいで分かりにくいのが、俺の拳と制服は返り血で真っ赤に染まっている。

「きったねえな……。血って乾いたらぜんぜん取れねえんだぞ……」  
両親は仕事が多忙のため、家に帰ってくることはほとんどない。だから、この血まみれの制服も自分で洗わないといけないことになるわけだ。……ちなみに言うておくと、俺の親は別に悪の秘密結社に所属しているわけでもないし、マッドサイエンティストでもない。強い正義感とそれを貫き通す意思を持った、俺が心から尊敬する数少ない人間だ。

俺は両親が次に帰ってくる日を確認しつつ、帰り道を進む。すると、急に誰かの視線を感じた。……いや、このねっとりとした視線はの正体はおそらく奴だ。俺はそう結論付けると視線を無視して家を目指す。奴に関わるとろくなことになるので、シカトするに限る。

「ちよつとく、待つてくさいよセンパ〜イ」

刹那、街灯の光によって生み出されていた影が大きく揺らいだ。ズズツツ……と周りにあった影が、一か所に集まり、あつという間に少女の姿が現れる。黒いゴスロリ衣装を身にまとった少女はその真っ赤な目を新に向ける。

「私のことを無視するなんてく、ひどくありませんか？」

「ひどくない。これから俺はこの頑固な汚れと格闘しなければいけないんだ、ストーカーと遊んでやる暇なんて無い。……後、いちいち語尾を伸ばすな。イライラするんだよ、吸血鬼」

「やだく、先輩つたらく。あんなネクラ共といっしょにしないでくださいよ。私シヨックで先輩の血、吸っちゃいますよ〜」

いや何でそうなる。物騒極まりない言葉を吐いた後輩に俺は仕方なく顔を向ける。すると、彼女はともうれしそうな顔で俺に飛びつ

いてきた。勿論かわしたが……。

「で、いったい何の用だ、アメリカ・ローンブライド？」

硬いアスファルトと情熱的なキスを交わしていた少女が顔を上げる。相変わらずな笑みを顔に浮かべながら、こう言ってきた。

「いえ、先輩に別のオスの匂いが付いていたものですから、まさかソツチに目覚めてしまったのかと心配になりました……」 「死ぬ」

奴が言葉を言い終わる前に、俺は投影した短刀を奴の喉笛に突き立てる。ブチブチツと首の筋肉がちぎれる感触が手に伝わる。だがそれだけだ。その傷口から鮮血が溢れることはなく、彼女の血液は何事もなかったかのように体を巡回し続ける。アメリカはニタニタと気持ちの悪い笑みを浮かべたままだ。……一回本気で殺したほうがいいかもしれないな。

「まあ冗談はさておき……」

自分の喉から刀を引き抜いたアメリカはこれまでとは一転、真剣な顔立ちになりこう聞いてきた。

「先輩、あなたは一体何をしようとしているのですか？」

「ああ、勘違いしないでくださいよ先輩。別に殺しをするなどというつもりはありません。私だって聖人君子ではありませんしね。しかし……」

彼女は手の中で短刀を弄びながらこう続ける。

「あまり私の領土<sup>ドミニオン</sup>で好き勝手しないで欲しいんですよね。隠蔽工作とか大変なんですよ〜？」

「……」

「先輩とはこれからも良好な関係を築いていきたいと思ってるんですけどね。ですが私にも領主としての責任などがありますから……」

……成程。つまりこれは警告という事か。確かに最近はこの領土で2、3人転生者を排除したからな。あまり派手に動かれると困るという訳か。

「お前の言いたいことは理解した。これからは余り迷惑を掛けないこ

とを約束しよう」

「まだ質問に答えてもらってないんですけど？」

彼女はじれったそうに体を揺する。その表情には若干のイラつきも見て取れる。おそらく、次あいまいな回答をすれば俺の首は吹き飛ぶだろう。

「・・・そうだな。おいアメリカ」

俺は目の前の少女に向かってこう問いかけた。

「お前は、『正義の味方』の存在を信じるか？」

アメリカside

目の前の人間は何を言っている？

それが彼女が最初に抱いた感想だ。

「・・・バカにしているんですか、先輩？セイギノミカタ？そんなものいる訳ないでしょう。そもそもそんな生物がこの世界に存在しているのなら、先輩も私も、こうなつてはいないはずですが？」

現実はおとぎばなしとはちがう。

どれだけ祈っても奇跡は起きないし、都合のいい展開なんて訪れない。強者が弱者を力でねじ伏せるのが当たり前で、負け犬は地を這いずり回るしかない。欲望と裏切りで満ちている世界。それがこの世界の現状だ。

私も彼も、そんなことは痛いほど分かっているはずだ。だからこそ、彼が何を言っているのか理解できなかつた。

そんな後輩を見つめながら、少年は口を開く。

「お前には教えといてやるか。俺の計画を」

新side

「ふうっ・・・」

数時間後、

俺は月光に照らされながら、ワイングラスを傾けていた。もともとは父親が趣味で買ってきたもので、その中から一本を失敬した。最近はこちらを飲みながら部屋でくつろぐ事がマイブームになりつつある。赤色の液体から漂ってくる香りを楽しみながら、彼はおもむろに微笑んだ。

アメリカには俺の計画を全て話した。あれは傑作だったなア……。金魚みてえに口、パクパクさせてやんの。相当衝撃だったみたいだ。「さて……。これからどう動くか……」

アメリカに計画を話した目的は「勧誘」。彼女は広い人脈の持ち主だ。これから計画を始動させるには、俺は余りにも無知だ。しばらくは情報収集などに力を入れることになるだろう。それには彼女の持つ何千、何万もの人脈が役に立つ。幸いアメリカも前向きに検討すると答えていた。

先は長い、だが俺は進み続けるしかない。たとえそこが茨の道でも、死体が散らばる戦場でも。誰が敵になろうと、俺はそいつを殺してでも突き進む。

「正義の味方」を作り上げるまでは。





(あれのパンチは流石の俺でも効くからな・・・、というか本当にただの一般人かアイツ?)

そんなことを考えつつ、俺は戦場購買に向かう。もはや一刻の猶予もないのだ。俺は力強く足を踏みしめ、廊下を全速力で走りだし――

「神田君、神田君！大ニュースだよッ!!」

「グフオツツ!?!」

――興奮した様子の女からボディイブローを喰らっていた。メリメリツと彼女の拳が俺の腹にねじ込まれるのが分かる。みぞおちは人体の急所の一つという事をどこかの本で書いてあったが、それを痛いほど痛感した。

「・・・つーか何すんだよこの野郎!?!こっちはただでさえ時間がないんだ、邪魔すんだったら内臓引きずり出すぞオラアツ!?!」

「まあまあ落ち着いてよ、というか素に戻っちゃてるよ?」

「誰のせいだと思っていやがる!?!」

そこらのチンピラなら尻尾を巻いて逃げるほどの殺気を浴びせるが、彼女は平然と会話を続ける。相変わらずムカつく面をしていやがるな、この女。

「そんなことよりね、今朝ちよつと面白い噂を聞いちゃつて」や、やばいぞ。残り三分しかねえつ!?!うおおおおおおおツ!!」・・・つてもういないし・・・」

後ろでなんか言ってるが無視だ無視!こっちは命がかかっているんだよ!

「あーあ、残念。原作開始が今日だってこと言いそびれちゃった」

俺が去って行った後、女がくすくす笑っていたことを俺は知らない。

「将来かく、アリサちゃんはずかちゃんは決まってるんだよね？」  
「親が会社経営だし、いっぱい勉強して跡を継がなきゃぐらいいだけど  
？」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職がいいな〜って思ってる  
けど」

「……この世界の小学生は少し精神年齢が高すぎる気がする。俺は  
幼馴染たちの会話を聞いて、そんな感想を抱いていた。」

「だってまだ俺たち小3だよ？義務教育の真っ最中だよ？普通だつ  
たら、「昨日テレビで何見た？」とか、「今日皆でス〇ブラしようぜ」と  
か、そんな感じの会話になるだろ?!なんか受験生の会話を聞いている  
気分なんだけど!？」

俺が転生前と転生後の世界とでの圧倒的な差に戦慄していると、な  
のはの悲鳴が聞こえた。どうやらなのはが「自分には取り柄がない」  
と言って、アリサの反感を買ったようだ。

「にやああああああ!?隼人君、助けてほしいの〜!？」

「だが断る。アリサ、やっちゃつていいぞ」

「そういうことよ、覚悟しなさいなのは!」

「ふええええええええ!？」

そんな微笑ましい光景を眺めていると、ズバンツ!と扉が開かれ金  
剛が屋上にやってきた。

「こんな所にいたのか、俺の嫁たちよ!!」

「二うげツ……」

途端に嫌な顔になる三人。気持ちは大いにわかるぞ、お前ら。俺  
だってあんなこと言われたらドン引きする。つーかコイツ、何故か俺  
にちよつかい出してくるんだよな。

「ちよつと、なんであんたが来てんのよ!」

「ハッハッハ、照れるなよアリサ」

「照れてない!というか名前と呼ぶな!」

あいつとアリサは特に相性が悪い。アリサがほかの二人より強気  
な性格だからだろう。にしても流石に我慢できないな、嫌がつてるの  
が分からないのかあいつは……。

「オイ金剛、いい加減やめろよ。アリサが嫌がってるだろ」

「お前には用なんてないんだよモブ！早く嫁から離r————バゴ  
ハアツ!!?」

「!!?」

あ……ありのままに今起こったことを話すぜ。「俺は金剛と会話していたと思ったら、金剛がはるか向こうのフェンスに吹っ飛んでいった。な……何をいつているのか分からねーと思うが俺も何がされたのか分からなかった。催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなものじゃ断じてねえ。もつと恐ろしい物の片鱗を味わったぜ……  
……って、呑気にネタに走ってる場合じゃない！いったい何がツ  
!?

俺が屋上の入り口に目を向けると、そこには————

「ぜえ、ぜえ……。ぎ、ギリギリ間に合ったよアリサちゃん……。……つていうかコンちゃん!?なんでそんなボロボロなのー!」

状況が呑み込めず、あたふたしてる新がいた。どうやら勢いよく開けたドアが金剛を強打したようだ。

「……新、よくやったわ」

「へ……?」

アリサはそんな新の肩に、ポンツと手を置いてそう言った。今回は  
かりは激しく同意である。